

テレビドラマ「14才の母」「産む」「産まない」熱い論議

2006年10月11日から日本テレビ系で放映されたドラマ「14才の母」。名門女子中に通う少女が、学習塾で1歳年上の少年と出会い、1度の性交によって妊娠してしまう。両親や教師の反対にもかかわらず産むことを決意する - というストーリー。

14歳の妊娠という話題性から、初回の平均視聴率は19.7%と高く、特に13~19歳の視聴率は27.4%と群を抜いていた。同世代の子どもやその親たちの中にはドラマの展開に衝撃を受ける人が多く、産む産まないの選択をめぐる議論は熱を帯びてきた。



性の低年齢化とは逆に性教育を避ける傾向が強まる中、ドラマはそのすき間を突いた形だ。

ドラマ開始前からテレビ局には「14歳のセックスを認めるつもりか」といった批判的な意見が約400件寄せられた。放送が始まると番組のウェブサイトに1万件を超える書き込みがあり、その後もさまざまな声が寄せられていた。

10代からは共感、親世代は不安に

サイトの中では「14歳の出産」の是非が熱く語られている。

「ドラマを見て、その気になってしまうような若い方たちが少なからずいるのには少々不安な気持ちにさせられます」(40代の3児の母) 「同じ14歳の娘を持つ母です。娘と毎週、見えています。娘の友達には、お金がほしいから『援助交際』をしようと言っている子もいるそうです。援助交際して子どもができることだってあると思います。このドラマは、安易に、性交渉をしてもいいとやっているように思えてならないです」(30代の母) 「恋愛していると、主人公の気持ちにすごく共感できるんだ。恋愛していると毎日彼氏のことばかり考えてる。妊娠は愛しあった結果だよ。産まれてくる子供は愛の証しなんだよ。愛の証しを壊す事なんて簡単にできないよ」(10代の女性) 「批判する前に、どうしたら望まない妊娠をする若者が減るのか、それを考えてほしい。学校や家庭で学ぶべきこと、性教育をしないでにおいて責任だけ取らせようと、批判だけする大人の方にこそ責任があるのではないのでしょうか？」(20代の女性)

10代の女性からの意見は批判よりも共感するものが多く、主人公の14歳の女の子と同じように10代で母になった人、中絶経験のある人からの声も少なくない。逆に親の世代は出産を疑問視する声が圧倒的だ。

背景に性教育避ける傾向

性教育に詳しい東京学芸大学助教授の中澤智恵さんは、ドラマが話題になる背景には、家庭や学校で適切な性教育が行われていない現状があるのではないかと指摘する。「10代の子どもを持つ親にとって、人ごとではないという切迫感があるのでは。しかし、子どもの性的経験に対して、親たちはどう対応したらよいのか戸惑っている。家庭内で話し合う機会が少ないうえ、学校での性教育も不十分だ。こうした現状から、ドラマが親たちの関心を引くのではないか」

また、10代の妊娠の相談に応じている日本家族計画協会クリニックの医師、北村邦夫さんは、ドラマが若い世代に与える影響を心配する。

「たとえ1回でもセックスすれば妊娠、性感染症にかかる恐れはある。こうした性教育はおざなりにしながら、結果として起きた妊娠に対しては命の大切さを強調するのはおかしいのではないか。人工妊娠中絶は悪、産むことは美德と決めつけるような風潮があるとすれば不安だ」と話している。

なぜ今「14才の母」か - 脚本家・井上由美子さんに聞く

虐待死、親殺し、いじめ、自殺……と、家族や学校を巡る事件が続いている。「14才の母」は、中学2年生の女の子が妊娠するという刺激的な内容で、暗い事件の連続と相まって「少年少女の性の乱れを描いた風俗ドラマ」と見る向きがあるかもしれない。だが、脚本家の井上由美子さんは「このところ続く事件で、命が軽くなったなあという思いがベースにあり、ドラマでは命の重さ、大切さを考えてほしかった」と語る。

井上さんにドラマ制作の狙いを聞いた。

女子中高生の妊娠という題材は、今までも多くのドラマで扱われてきた。大半は、学校内の不祥事として秘密裏に処理され、本人もすぐ中絶手術を決め、友人たちからカンパをもらって一件落着といったストーリー。

「立ち止まって考えてもらいたいと思った。今の子供は性や中絶の知識はあっても、いざそうなったときに、事態をどう受け止めるか、考えることが少ないようだから」と話す

井上さんは、主人公の名門私立中学2年生、一ノ瀬未希を、友達の多い、ごく普通の明るい少女に設定した。住宅メーカー営業部次長の父と職場結婚した母、小学生の弟の4人家族という中流家庭だ。しかも、未希の相手は、好意を持つ塾の仲間でおとなしい中学3年生。二人が街で不良に絡まれ、逃げ込んだ公園で互いの思いを話すうちに結ばれて - という





自然な流れだ。

「決して特別なケースでなく、どこ
の家庭でも起こりうる話として受け
取ってもらいたかった」

2カ月後、妊娠が判明。一人で思い
悩む未希。すぐに母親に知られ、ワッ
と泣き伏す。母は我が子の苦しみの重
さを支えるようにじっと抱きしめる。
事実を知らされた父親は、否定し、激
怒し、混乱し、やがてあきらめ、受け

入れ、収拾策を探す。産婦人科医師との面談を経て、一家は中絶を選択する。ここまではよくある展開だ。

手術直前、母娘は順番を待つ間、一つのベッドで語り合う。未希の心に何かひらめき、突然、出産を決意する。自分が生を受けたときの両親の喜びが母の口から語られたとき、生命誕生の神秘を感じたのだ。

「娘の手を握りながら、自分が母になった体験を話す。率直に反省もする。それが娘の気持ちを揺さぶった。その重いシーンを、未希の母親役を演じている田中美佐子さんが共感を呼ぶ演技でやってくれた。人の命って、いろいろな可能性の中で奇跡的に生まれてきたものだ、ということに未希は気づいたんですね。気づくことが大切です。命を生む性の母親目線で語っていくと、分かりやすいですね」

生殖医学、移植医学の発展は、時として人の体を機械部品のように思わせる。だが、人間はあくまで動物。しかも肉体に宿る心に思いをはせると、生まれてくる命の不異議さが胸に迫ってくる。

「人間の死を通して、命の大切さ、尊さを描くドラマは今までたくさんありましたが、今回は誕生を通してそれを描きたかった」

中学生の妊娠に、世間は寛容ではない。ドラマは後半に向けて“父親”、男子の親、同級生、先生、さらに雑誌メディアを巻き込んで、混乱と非難の嵐が待ち受けている。

視聴者からは「寝た子を起こすようなドラマを作るな」などと、批判的なメールが届いているという。現代社会によどむ難題をテーマにして果敢に切り込むドラマを作る以上、賛否両方の声にさらされるのは避けられない。

「私自身、何が正解か分からない。でも、命の大切さについて、このドラマを見て親と子で語り合ってもらえたら」と、井上さんは結んだ。

「14才の母」衝撃的なこのタイトルに驚き、このドラマに複雑な思いを寄せた方は多いのではないだろうか。私もその1人である。14才の妊娠・出産を取り上げたドラマが一体どのような結末を迎えるのか、物語を通してどんな教訓を示すのだろうか。

14才の母が肯定され、14才の妊娠が美化されることはあってほしくないと思ったが、この物語の結末は無事子どもが生まれ、主人公たちは結婚することを宣言してハッピーエンドで終わっている。すべてが丸く収まり、1つの“感動的なストーリー”として終わっていることを残念に感じている。ドラマを通して14才の妊娠を認め、出産をすることがあたかも“普通”であるかのような印象を受けた。上記の日本家族計画協会クリニックの医師、北村邦夫さんがおっしゃっているように、このようなドラマを通じて人工妊娠中絶は悪、産むことは美德と決めつけるような風潮が生まれ、広がることは避けたい。

ドラマの公式ウェブサイトのBBSを実際に読んでみると、10代の方はこのドラマに感動し、共感される方が多く、反対に20代、特に30代の方は批判や疑問の声が多かった。10代の方の意見の中には、「同じ中学生で初体験をした自分にもこんな生き方があるんだと尊敬した」という意見や「強い意思と愛があれば中学生でも妊娠、出産の不可能も可能になると思った」というようなコメントが載せられており、驚きと同時に怖さも感じた。このドラマの制作意図は視聴者に命の重さ、大切さを考えてほしいというものであるが、その意図に反して、特に10代の視聴者の方に対しては中学生での妊娠・出産への憧れや尊敬を生み、自分もそうなりたいと思うようになった人たちが少なからずいることに考えさせられる点も多い。意見は世代によってはっきりと分かれていたが、私自身は、このドラマを見て共感よりも疑問や懸念を抱き、腑に落ちない部分が多くあった。

上記の通り、「14才の母」は10代の方の視聴率が群を抜いて高い。このドラマが視聴者である中高生へ与える影響は計りしれないだろう。

このドラマでは産む・産まないの決断がストーリーの中心にあり、主人公を始め、交際相手の男の子やその2人のそれぞれの両親、学校の先生、友人、様々な人の立場からの考えを映し出していた。しかし、14才という年齢にして子どもを実際に産むのかどうかよりも、本当に考えたいのは14才でおそらく性に関する十分な知識もないままで性行為をするということである。

私自身は14才での性行為には反対である。かといって何歳からなら良いという年齢を定めることも難しいと思うが、性行為をする前に最低限、自分たちで責任が取れるような知識と行動を備えることが必要であると思う。中学生で身体的そして精神的にもまだ十分に成熟しきれていない状態で性行為をし、まして妊娠をすることは本人にとってもその赤ちゃんにとってもリスクが大きい。義務教育中で経済的にも自立できておらず、妊娠したときにも両親や自分たち以外の人に援助・協力してもらわなければ産むことも中絶することもできない。自分たちで責任をとることが難しいなかで安易に性行為をすることは性自分を軽視することへもつながっているように感じる。

性の低年齢化が進んでいる今、性教育の必要性がますます高まる一方で、学校における

性教育が頻繁に問題として取り上げられている。過剰な性知識を与えることは子どもたちに性行為を認めているように受け取られ、コンドームを使った授業も過激な性教育としてバッシングが起こることもある。

そのため、多くの学校では依然として積極的な性教育が行われていないのが現状であるが、実際に今起こっている出来事として、中高生の性に対する意識は確実に以前とは変わってきており、性行為も身近なものとして存在しているのである。どんなに大人が性行為に関する知識を教えるのはまだ早いと思っけていても、子どもたちの身の回りにはインターネットや友達、マンガなどの不確かな性情報が氾濫している。彼らが誤った性情報を鵜呑みにし、妊娠や性感染症などの可能性も考えずに安易に性行為へ走り、性や命を軽々しく認識する前に、正しい性知識を子どもたちに伝えることが非常に重要である。性知識も大人から見たら当然のことでも、子どもにとっては分からないことだらけなのだ。古くから根付いている、性に関しては子どもたちの自然な学習に任せるという考えだけでは今の子どもたちの環境では本当に必要な情報は身につけにくいだろう。きちんと大人が子どもに向き合って教えなければ、確実に正しい情報は伝わらないのだ。

私は性教育に大人がむやみに制限をかけてはいけないと思う。例え子どもであっても、自分の性や異性に関して、知っていけないことはなく、正しい知識を正しく伝えられ、知る権利があると考えている。一方的に大人が子どもの年齢だけで早いかどうかを判断してはいけない。性に対する意識は個人差もあるが、子どもたちの現状を踏まえ必要とされるならば、それは決して早くはない。

「14才の母」をきっかけに家庭で性について話しをすることができたなら、このドラマはそこで大きな意義があったと思う。性教育は学校だけでなく、家庭で行うことも重要な役割を担っている。子どもたちにとって一番身近な存在である親と一緒に、日頃からオープンに性について話す習慣を持ち、親も自分の子どもの現状に合わせて必要な知識をきちんと教えることが大切である。それは他のどんな性教育よりも意味があるのではないだろうか。このドラマが多くの人にとって性について考え、見つめなおすきっかけとなっていてほしい。

《参考・引用》

- ・毎日新聞 2006年10月19日
- ・毎日新聞 2006年11月6日
- ・毎日新聞 2006年11月25日